# あゆみ通信

VOL. 128
あゆみの会（真宗大谷派大阪教区第2組同朋の会推進員連絡協議会）
会長　浪花　博
広報　本持　喜康

## 名を呼ぶことは阿弥陀仏の本願の教えを聞くこと

## 第2組聞法会にご参加を

第2組では「共に学ぶ」ために、毎年組内の住職や寺族、門徒や推進員等が、宗祖親鸞聖人の教えを聞く聞法会を開催。組内の寺院を会場に、毎回30名前後の参加で盛り上がります。どうぞ、ご参加下さい。

## 8月聞法会は

日時８月26日（月）午後２時
会場　光照寺（天王寺区上汐）
内容　お勤めと法話
講師　高島　洸陽先生
　　（生野区　専光寺）
参加費　５００円

### あゆみの会第２回例会
## 大和大谷別院参拝と今井町散策

稱念寺で全員集合

復活野外例会は、５月26日（水）に、門徒会からのお仲間と16名が参加して、真宗大谷派大和大谷別院と重要伝統建築物保存地区今井町を訪ねた。

別院で外川輪番と

近鉄西八木駅で合流したガイドさんが案内の今井町は、浄土真宗本願寺派稱念寺の寺内町。戦国時代の天文年間（1532-1555）に近江河瀬城城主今井兵部郷豊寿が、顕如上人の命により今井に移り、一向宗本願寺としての要塞都市が建設され、石山合戦で降伏した折、本願寺の使者の一人として織田信長の元に赴いている。その後、武士を返上して釈門に帰り、幕末まで中本山的な役割を果たしていたようです。当日はガイドさんの案内で主な文化財の町屋と稱念寺を見学見学。稱念寺では第13代住職よりお寺の略歴をお聞きした。。昼食後は、近鉄築山駅を下車して教如上人ゆかりの大和大谷別院へ。別院には第2組の憶想寺の若院が勤めておられ、お世話になった。最近就任の外川輪番による調声で「正信偈」のお勤めと沿革についてご説明を受けた。時間が無くなり、法話を聞けなかったのが残念だったが、楽しい時間を過ごして無事に帰還した。
（レポート・写真：浪花博）

## 予告　朋友会と合同の第3回例会は、９月24日（火）午後1時30分から、即應寺で開催

第2組の次世代を担う青年僧との、お寺のあれこれの楽しい話し合いです。ご参加下さい。

## 差別は当たり前？

最近、テレビや新聞等で、企業経営者や代表が、他社との「差別化」という言葉が飛び交う。びっくりするのだが、この国はいつの間に「差別を是とする」ようになったのか。

小生の在職時、「部落問題」に関わる仕事をしていたが、わずか10数年前までは、国を挙げて法律も作り、国民の責務として、差別の解消を目指して「同和問題」に取り組んでいた。地方行政を始め、企業や市民団体、宗教組織やそれこそマスコミ各社や教育機関などがこぞって被差別の人々と共に「差別の解消」にまがりなりにでも取り組んでいた。いつのまにか特別施策は打ち切られたが、もう差別は無くなったのか？

だからと言って、「差別しても構わない」という発想は無いと、こんな言葉は使えないと思うのだが。マスコミを始め何も言わない。不思議としか言いようがない。

私見であるが、あくまでも「差別してはいけない」と思う。

わが宗祖親鸞聖人の教えは「願以此功徳　平等施一切　」であるとするなら、阿弥陀さんはどう思われているのかな。南無阿弥陀仏。（本）

# 第2組聞法会報告

2019年７月3日(水)午後２時から、天王寺区の佛足寺(清水眞一住職)を会場に、第２組聞法会「共に学ぶ『正真偈』」が、講師に新田修巳先生(第４組正業寺)をお迎えし、組内の住職や寺族、門徒や推進員２８名が参加して開催された。

今回は「正信偈」の「報土因果顕誓願」を、特に「報土」について、**報土と言うのは阿弥陀仏の誓願によって作られた精神の領域で、また、いのちの故郷である**と。「報土」は愛に基づいており「ジャータカ物語」では「いのちはそれを愛そう、愛そうとするものに帰属する」と。

また、ヘレンケラーのお話から、サリバン先生にヘレンが「愛とは何ですか」と尋ねると、先生は「大地に雨が降って、いままで渇いた地面が潤される状態である」と答えられたと。質疑、恩徳讃を唱和して散会となった。

(レポート：細川　克彦)

# 如是我聞

## 細川　克彦(佛足寺)

新田先生は、「正信偈」の曇鸞大師の「報土の因果、誓願に顕(あらわ)す」の報土について、報土はいのちの原点であり、また、愛の原点であり、摂取不捨（おさめ取って、捨てない）の働きをしている。

「南無阿弥陀仏」の六字の名号は、本願の世界(報土)からの「阿弥陀仏帰命しなさい」と言う呼びかけの言葉で、その摂取不捨の無量寿のいのちに目覚めることが出来た時、阿弥陀仏を信ずる心が起こってくる。それを「信心」と。

休憩後、先生が出会われた善知識(諸先輩)について話された。25歳の時、安田理深先生に論文を読んでもらった時、「もっともっと悩まねばなりません。人類のいろいろな問題が身に押し寄せてきているのだから、安っぽい信仰に浸って居てはいけません。そんな安っぽい喜びを打ち破ってくれるのが真宗です」

また、38歳の時、伝道講究所で講究の後、発表された時、和田稠先生から「教えが分かったように思ったとしたら、それは錯覚で、教えの深さは、海に錨を下ろして綱がどうしても海底に届かないことに気付かされた時しか知ることはできない」

また、竹中智秀先生から第4組の研修会で講義を受けた時、「如来の摂取不捨の心は『選ばず、嫌わず、見捨てず』であるから、真実したいこと、出来ることを他人と比べず、焦らず、諦めずにやりなさい」その言葉は、「自分や他人を大事にしていくことであり、また、頭が下がることである」と話された。合掌。

(今回も、細川克彦さん、浪花博さんのご尽力で、編集ができたことを、深く感謝する。あらためて、仲間とはいいなあ。有り難いなあ。(本))

# 6月藤園先生法話・続

(聞法の大切さについて「蓮如上人御一代記聞書」から)

また、155条では、日常の仕事の暇が出来たら聴聞するのではなく、日常の仕事の時間を削ってでも聴聞せよ。例え世界中が火となって燃えても聴聞する人は、二度と迷いの世界には戻らない。また、120条、137条を挙げられて聞法の後は同席の人たちと自分が聞き取ったことを話し合え。必ず、自分の都合の善いように受け取っているからと。

最後に、昨年の同朋大会の意見発表で、浪花益夫氏(法山寺)が「自分が如何に愚かなものあるかを知らされるまで聞法せよ。決して聞法して賢くなったり、えらくなったりするのではない」と話されたことを重ねて話され、くれぐれも間違った聞法をしないようにと丁寧に話された。

(佛足寺　細川克彦氏の聞書き)

藤園先生紹介の**「ひとつのことば」は、北原白秋作**。事務局

**ひとつのことばでけんかして**
**ひとつのことばでなかなおり**
**ひとつのことばで頭が下がり**
**ひとつのことばで心が痛む**
**ひとつのことばで楽しく笑い**
**ひとつのことばで泣かされる**
**ひとつのことばはそれぞれに**
**ひとつの心を持っている**
**きれいなことばはきれいな心**
**やさしいことばはやさしい心**
**ひとつのことばを大切に**
**ひとつのことばを美しく**

**「北原白秋」(1885-1942)**
**近代日本を代表する詩人。**